

<メディアウオッチ> 「美しい国」の根深い暴力・いじめ体質の核心を報ぜよ

上出 義樹

表面化している事件は氷山の一角

体罰やいじめ、柔道界の暴力事件など、極めて日本的とも言えるニュースが連日のように紙面を賑わわせている。しかし、事件として表面化しているのは全国の学校などで実際に起きている不祥事のうち、おそらく氷山の一角であろう。マスメディアは、一連の事件の背景にある根深い問題の核心に、戦前の源流にまで遡って迫ってほしい。

源流に旧日本軍の鉄拳制裁 民主主義根付かぬ日本の現実

同級生のいじめ行為を除くと、最近報道されている事件は教師と生徒、先輩と後輩、師と弟子など、タテの人間関係が中心である。

新聞はほとんど触れないが、一連の陰湿な事件の背後に重なって見えるのは、上官に絶対服従を強いられ、ビンタや新兵いじめなどが当たり前だった旧日本軍の体質である。古くて新しい体育系クラブの鉄拳制裁などは、旧軍のスタイルが一つの源流とも言えるのではないか。日本には、人間が人間を尊重する民主主義がまだまだ根付いていないということなのだろう。

精神主義の趣強い「美しい国」の本質につながる問題

在日外国人たちからは一連の事件に「とても、民主主義の国とは思えない」との声も聞かれるが、問題は安倍晋三首相が高く掲げる「美しい国、日本」の旗である。戦前の日本や軍隊を美化する一方、過去の反省を軽視する傾向が強いだけに、暴力・いじめ問題への対応も甘くなる懸念がある。というより、理不尽な暴力や体罰、いじめは、民主主義というよりは精神主義の趣がある「美しい国」の本質を示す問題と言えるかもしれない。マスメディアには、この点を含め、暴力・いじめ問題をしっかり掘り下げてもらいたい。

(かみで・よしき) 北海道新聞で東京支社政治経済部、シンガポール特派員、編集委員などを担当。現在フリーランス記者。上智大大学院博士課程（新聞学専攻）在学中。